

# 戦争体験「語り」の継承とアーカイブ (3)

— 広島「被爆体験伝承者」のデビュー —

外池 智

## Study about inheritance of telling war experience(3)

-Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend" debut:

TONOIKE, Satoshi

### Abstract

This study is in published studies on the construction of the next generation of peace education is continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the 2009 fiscal year, 2012 year telling, especially by using the hierarchical archive.

Talk about the experience of war, after the war 70 years has passed since World War II at the age if 10 -year-old, no longer its population total population 8%. Is conducting a trial in these circumstances, the precious "narrative" to archive in a variety of ways, also things as a succession of archives of war relics are also underway. Practice should be called "peace education of the next generation", so to speak, in school, no longer talk of a direct war experience, but by using the hierarchical archive is ever-changing and expanded.

In this study, efforts in the war experience narratives inherited projects from fiscal year 2012 has been approached as survivors in Hiroshima "experience tradition" for the first lecture by graduates of the 1 phase Takahashi, Masahiro, consider.

**Key Word :** inheritance of telling war experience, Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend"

### 1. 本研究の目的

本研究は、2009年度から推進している戦争遺跡に関する研究<sup>1</sup>、2012年度から推進している戦争体験「語り」の継承に関する研究<sup>2</sup>の継続研究であり、特に継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築に関する研究<sup>3</sup>の一端を発表するものである。

戦後70年の歳月が経ち、戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に10歳とすれば、もはやその人口は全人口の8%となった。こうした状況の中、その貴重な「語り」を多様な方法でアーカイブする試みが進められており、またモノの継承として戦争遺跡や遺物のアーカイブも進められている。さらに、学校教育においても、もはや直接的な戦争体験の「語り」ではなく、継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育<sup>4</sup>」と呼ぶべき実践が、刻々と展開されている。

本研究では、こうした取り組みの内、戦争体験「語り」の継承プロジェクトとして2012(平成24)年度から取り組まれている広島の「被爆体験伝承者」について、第一期修了生の高岡昌裕氏による初めての講話を取り上

げ、検討していきたい。

### 2. 「被爆体験伝承者」養成の概略

戦争・戦場体験者の減少の中、全国各地で展開されている戦争体験の「語り」の継承やアーカイブは、「語り」による証言を何らかの媒体(文字、音声、映像等)でそのままアーカイブする場合とある特定の養成プログラムを経た方々に継承する試みが行われている。2012(平成24)年度から取り組んだ研究<sup>5</sup>では、特に後者に注目し、基本的な継承プログラムの内容構成の調査・分析を踏まえて、その特色を明らかにした。取り上げた戦争体験「語り」の継承プログラムの具体的事例は、資料1の通りである。

さて、このうち特に広島市市民局国際平和推進部平和推進課により取り組まれた「被爆体験伝承者」養成プロジェクトを取り上げたい。このプロジェクトは、2012(平成24)年度に発足している。その目的は、「被爆者の高齢化が進み、被爆体験を直接語り継ぐことができる方が減少している中、被爆者の被爆体験や平和への思いを次

## 資料1 戦争体験「語り」の継承プログラム

	事業名	事業主体	実施期間
広島（3件）	・「被爆体験伝承者」養成プロジェクト	広島市市民局	2012-
	・「ヒロシマピースボランティア」事業	広島平和文化センター	1998-
	・「原爆遺跡フィールドワーク」	原爆遺跡保存運動懇談会	1990-
長崎（2件）	・「青少年ピースボランティア」事業	長崎市	2002-
	・「被爆体験記朗読事業（朗読会／朗読ボランティア育成・派遣）」	国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館	2011-
沖縄（4件）	・「ボランティア養成講座」	沖縄県平和祈念資料館	2004-2006
	・「子や孫に語り継ぐ平和のウイ事業」	沖縄県平和祈念資料館	2012-2013
	・「次世代プロジェクト」	ひめゆり平和祈念資料館	2002-
	・「南風原平和ガイド養成講座」	南風原町	2007-

世代に確実に伝えるため、被爆体験証言者の被爆体験等を受け継ぎ、それを伝える『被爆体験伝承者』を養成する<sup>6)</sup>ためである。

養成期間は3年間で、その概略は、初年度2012（平成24）年度は研修（平和文化センターが委嘱している証言者による被爆体験講和の聴講）、証言者と伝承候補者の交流会、2年目の2013（平成25）年度は証言者と伝承候補者とのマッチング、証言者から伝承候補者への被爆体験等の伝授、そして最終年度の2014（平成26）年度は講和実習として、実際の「語り」の実践と伝承者の認定となっていた（巻末資料2参照）。

この養成プロジェクトは、その後も毎年継続的に募集され、基本的な養成プログラムは大きな変更はなく今年度も踏襲されている。

応募者は、初年度の2012（平成24）年度に応募は137人、次の2013（平成25）年度は68人、次の2014（平成26）年度は49人、そして今年度2015（平成27）年度は69人が応募しており、今後も継続する予定である。

## 3. 第一期生の修了

第一期生は、晴れて昨年3月に修了し、広島市より正式に「被爆体験伝承者」として認定された。第一期生の修了者は51人（修了達成率37.2%）であった。（資料3参照）しかし、修了に至らなかった86名が全て脱落したのではなく、未だ十分な力量を得ずとの判断から、研修を続けている方が約30名おり、担当者によれば最終的には80名程になるのではないかとされている。

まず応募者の年齢について、「被爆体験伝承者」では137人の平均年齢は57.1歳で最少年齢は19歳、最高年齢は78歳であった。最も多い年代は60歳代で59人（43.1%）、次は50歳代で32人（23.4%）で、応募者の内この50代60代で2/3を占めていることがわかる。それに対して、修了者の総数は51名（37.2%）、平均年齢は61.8歳、最少年齢は30歳、最高年齢は76歳であった。数的に多い年齢層は、やはり50代60代であり、修了者

全体の72.5%を占めていることがわかる。とりわけ60代は全体のほぼ5割を占めた。しかし、修了達成率からすると、70代が56.3%で最も高く、50代は37.5%、60代は42.4%であった。修了者のうち最も多くを占めるこの年齢層であっても、ほぼ4割の達成率であることがわかる。とりわけ残念なのは、10代と20代の方の修了者が0人であったことである。

## 資料3 第一期「被爆体験伝承者」の属性

区分	修了時	応募当初	達成率	
人数	51人	137人	37.20%	
平均年齢	61.8歳	57.1歳		
最高齢	76歳	78歳		
最年少	30歳	19歳		
年齢層	10歳代	0人(0%)	1人(0.7%)	0%
	20歳代	0人(0%)	5人(3.6%)	0%
	30歳代	4人(7.8%)	11人(8.0%)	36.40%
	40歳代	1人(2.0%)	13人(9.5%)	7.70%
	50歳代	12人(23.5%)	32人(23.4%)	37.50%
	60歳代	25人(49.0%)	59人(43.1%)	42.40%
	70歳代	9人(17.6%)	16人(11.7%)	56.30%
居住地	80歳代	0人(0%)	0人(0%)	0%
	広島市内	35人(68.6%)	101人(73.7%)	34.70%
	広島市外の県内	11人(21.6%)	22人(16.1%)	50.00%
	県外	5人(9.8%)	14人(10.2%)	35.70%
	(4都道府県：東京1人、京都1人、奈良1人、兵庫2人)	(10都道府県：北海道、東京、山梨、京都、大阪、奈良、兵庫、鳥取、山口、福岡)		

・広島市市民局国際平和推進部平和推進課作成資料（2012年7月4日）と広島平和資料記念館啓発課提供資料（2015年6月）より作成

次に性別では、応募当初は男性43人（31.4%）、女性94人（68.6%）で女性がほぼ7割を占めていた。修了者は、男性18人（35.3%）、女性33人（64.7%）であった。

次に申し込みの所在地では、応募当初は広島市内の方が101人（73.7%）で多くを占めていた。広島市外の県内の方が22人（16.1%）、そして県外の方は14人（10.2%、10都道府県）であった。10都道府県の内訳は、北海道、

東京、山梨、京都、大阪、奈良、兵庫、鳥取、山口、福岡であり、最も遠方は北海道の方であった。一方、修了者は広島市内の方が35人(68.6%)で、やはり全体の7割程を占めた。県外での修了者は5人であり、達成率35.7%は3年間のプログラムを考えると十分評価できるのではないかと。

#### 4. 第一期生の今年度の活動

修了生達は、その後公益財団法人広島平和文化センターから正式に委嘱を受け、「語り」の活動を昨年4月から展開している。まず、代表的活動としては、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館において、平日は1日1回、土日祝日は1日3回のローテーションを組み、その「語り」を実施している。また、英語による「語り」が出来る「伝承者」が5人おり、1日1回英語による「語り」を実施している。同センターの啓発課としては、このペースで年間約800回(内英語は150回)の実施を目指している。

例えば、5月の実施状況は巻末資料4の通りである。月曜日から日曜日まで全ての曜日で計74回実施されている。時間帯は、9:30～17:00まで30分の休憩を挟んで1時間ずつで1日5回。参加人数は、日本語の講話が401人(1回平均8.4人)、英語の講話が195人(1回平均7.7人)で、1回の講話ではほぼ10人弱の参加であったことがわかる。

#### 5. 「被爆体験伝承者」のデビュー

##### (1) 講話者の概略

さて、こうした第一期の修了生の内、初めて秋田で講話を行った高岡昌裕氏の講話の様子を紹介したい。

高岡昌裕氏は、1979(昭和54)年5月2日、広島市安佐北区生まれで講話時36歳、現在は兵庫県明石市在住である。戦後50年広島女学院高校で開催された、高校生平和サミットに参加。法務博士、現ホテル勤務という方である。

筆者が、「被爆体験伝承者」養成プロジェクトの調査当初からお世話になっているプロジェクトリーダーの西田満氏に、「是非、秋田で講話を依頼したい」「なるべく若い方で」と依頼したところ、この方ではと紹介していただいた方である。

##### (2) 講話のスケジュール

「被爆体験伝承者講話」は、昨年7月16日(木)に秋田大学教育文化学部第3号館254教室で実施した。日程の概略は以下の通りである。

14:30～15:00 戦争体験「語り」の継承と「被爆

体験伝承者」養成プロジェクト

15:00～16:30 被爆伝承者講話

16:30～17:00 質疑応答

まず、14:30より受付を開始するとともに、14:40頃から報告者により全国で展開されている戦争体験「語り」の継承の現状と今回の広島における「被爆体験伝承者」養成プロジェクトの概要について紹介した。高岡氏による講話は、15:00～16:30の1時間30分で実施してもらい、その後30分で質疑応答とした。

高岡氏の講話のプログラムは以下の通りである。

#### 資料5 高岡昌裕氏による「被爆体験伝承者講話」プログラム(93分46秒、23,758字)

被爆体験伝承講話	
被爆体験伝承者 高岡 昌裕 masahiro.takaoka@gmail.com	
平成27年7月16日15時～16時30分 於 秋田大学(外池智教授)	
1	イントロダクション(5分5秒(5.4%),1,200字(5.1%)) 自己紹介と被爆体験伝承者をめざしたきっかけ
2	広島市被爆体験伝承者事業の概要と課題(11分5秒(11.8%),1,824字(7.7%)) 体験していないことを伝承することの難しさと意義
3	被爆体験伝承講話(45分10秒(48.2%),10,942字(46.1%))
(1)	新宅勝文さんの体験(30分10秒(32.2%),8,056字(33.9%)) 実際に目にした8月6日の惨状
(2)	植田のり子さんの体験(15分(16%),2,886字(12.1%)) 8月5日の日記が最後に行方不明になった妹への思い
4	平和について考える(4分(4.3%),988字(4.2%)) 戦争はなぜいけないのか つらい体験をした被爆者がなぜこれまで語ってきたのか
5	メッセージャーとしての伝承者(9分45秒(10.4%),2,576字(10.8%)) 被爆者からの伝言
6	質疑応答など(23分1秒(24.5%),6,228字(26.2%))

※高岡昌裕氏提供資料より

・( )内は実時間とテープ起こし分の字数、さらにその( )内は%を加えている。

##### (3) 講話の内容

実際の講演の内容は、巻末資料6の通りである。講和から質疑応答まで、全文掲載してある。また、高岡氏が継承した新宅勝文氏、植田のり子氏の「被爆体験伝承者」養成プロジェクト時のプロフィールは、巻末資料7の通りである。

高岡氏の講和は、テープ起こし分で全93分46秒（講和60分45秒、質疑応答23分1秒）、字数だと全23,758字（講和17,530字、質疑応答6,228字）であった。時間数、字数とも、やはり「3 被爆体験伝承講話」が中心的位置を占め（45分10秒（48.2%）、10,942字（46.1%））、ほぼ半分を占めていたのがわかる。とりわけ、「(1) 新宅勝文さんの体験」部分は、30分10秒（32.2%）、8,056字（33.9%）と全体の1/3ほどを占めていた。これは、実際は新宅さんの「語り」ではなく、その前段部分で原爆投下に至るまでの歴史的背景、すなわち満州事変、日中戦争、太平洋戦争の概略、その時の市民生活などの「語り」があったためである。こうした「語り」は、実際の被爆体験者である新宅氏や植田氏の「語り」を展開する際には欠くことのできない部分であろう。しかし、実際の時間数と字数を鑑みて、また実際にその「語り」を聴取した感想からいえば、若干冗長であったことは否めない。

#### (4) 参加者の感想

参加者は、秋田大学教育文化学部の社会科学教育の免許取得科目を受講している学生を中心に27名、一般参加者2名（ともに土崎湊被爆市民会議の方）、その他、NHK秋田、ABS秋田放送、秋田魁新報社、河北新報社等のマスコミ関係者であった。

聴講したアンケートとして2点、「1. この『伝承者』養成プロジェクトについて、どのようにおもいますか?」「2. 実際に『伝承者』の方のお話を聞いた感想・意見等をお聞かせください」を記入してもらっている。以下はその感想から整理した意見である（巻末資料8参照）。

##### ① 「1. この『伝承者』養成プロジェクトについて、どのようにおもいますか?」

基本的には、「非常に意義あるプロジェクトだと考える」（1-1）、「ぜひとも浸透して欲しいプロジェクトであった」（1-3）、「誇るべきプロジェクトだと考えます」（1-22）というように、肯定的に意義あるものとして評価している意見がほとんどであった。とりわけ、「音声や映像ではなく、直接声で伝えられる方を育てていくことは、非常に意義あるものだと考える」（1-7）、「教科書や本、写真よりも言葉というのは人間により強い訴えかけるものだと思うので、聞いた話だとしても、口で伝えていく大切さがあるように感じた」（1-26）と言うように、継承的アーカイブではなく、まさにヒトが継承し語ることに意味があるとする意見や、また『『伝承者』自身が心を打たれたこと、感動したことを伝えることで、被爆者の気持ちや伝承者の気持ちがより聞いた人たちに心打たれる形になるのかなと思いました。『事実』だけ

ではなく、『思い』を伝え続ける良いプロジェクトであると思いました」（1-8）、「やはりヒトによる語りは、アーカイブなどの記録媒体よりも人の気持ちや感情、心情というものがより強く伝わってくると感じました」（1-12）というように、ヒトが語ることで、「事実」だけではなく、「思い」「気持ち」や「感情」を伝えることの意義に関する意見も見受けられた。

さらに、「長崎、東京、沖縄、土崎でも伝承者の養成がなされると良いなと思いました」（1-6）、「秋田でもやってみるといいのではないかと思った」（1-5）というように、全国や秋田の地でも養成プロジェクトの実施を望む意見も見受けられた。

また、「私は高校時代に広島で被爆者の方のお話を聞いた経験がある。その時も原爆の悲惨さを強く感じられ、よい経験となったが、今回は理性的に整理されたお話を聞くことができ、非常にためになった」（1-7）、「直接話を聞いた時は、その人の気持ちにおされてしまったところがありましたが、人を介して体験を聞くことで聞きやすさや、わかりやすさがあってよかったです」（1-19）というように、実際の被爆体験者の話と比較し、積極的に評価する声も見受けられた。

一方、批判的な意見としては、「たいへん難しいことと思う。伝聞・再伝聞を繰り返すたびに『体験談』に対する信頼度は低下すると思われる」（1-2）というように、「語り」を継承することでの劣化や精度の低下を危惧する指摘があった。また、「『実際に体験してもいない人の話なんて…』と軽視されることが考えられ、本やインターネットで得る情報と何が異なるのかを明らかにして、その優位性を示していかなければならない」（1-16）というように、他の情報媒体ではなく、伝承者の「語り」の独自性を問う意見もあった。

##### ② 「2. 実際に『伝承者』の方のお話を聞いた感想・意見等をお聞かせください」

基本的には、「とても情景が思い浮かばされ、悲痛な思いになった」（1-4）、「被爆体験者の方と同じくらい原爆投下の悲惨さが伝わってきました」（1-6）というように、原爆投下の状況が分かりやすく伝わったとの意見が多く見受けられた。加えて、分かりやすかったばかりでなく、「亡くなった人たちの無念さが語りの中にあられており、大変心を打たれました…中略（筆者）…今回の講話では言葉に表現できないくらい感銘を受けました」（1-8）というように、「心を打たれた」「感銘した」との感想もあった。さらには、少数ではあるが、「経験した本人ではないのだから伝わるものも弱まってしまうのではないかと考えていたが、全くそんなことはなく、寧ろ、聞いている側に分かりやすく噛み砕いてお話しして

くださるので頭に入りやすく、より状況が伝わって生々しさが増した感じを受けた」(1-13)というように、実際の被爆体験者の「語り」より高い評価をする感想も見受けられた。

また、講和後の質疑応答では、「もっと情感を込めて語った方がよかったのではないか」(1-2の参加者)との意見を出された一方で、「冷静に淡々と感情をなくして語られていたので、すんなりと頭の中に話が入っていった」(1-3)、「被爆者自身が語ると、泣き出すなど感情的になってしまうというお話があったので、淡々と語れるという点では非常に良かったと思います」(1-17)というように、淡々とした語り口を評価する意見も出されている。

一方批判的な意見としては、「背景のスライドがずっと死体がたくさんあるものであったので、最初の画面に戻すなどして、できれば控えてほしかった」(1-10)、「スライドで当時の様子を描いた絵を載せていたが、あまりにリアルすぎるのではないかと感じた」(1-13)というように、背景の死体のスライドに対する意見があった。

## 6. 結語

以上、戦争体験「語り」の継承として2012(平成24)年度から取り組まれている広島市の「被爆体験伝承者」について、第一期修了生の高岡昌裕氏による秋田での初めての講話について取り上げてきた。高岡氏の実際の「語り」について、養成プロジェクトに中心的に関わっている西田氏、講話者自身の高岡氏、そして実際に聴講した学生達と筆者との意見で対立した2点に注目したい。1点目はその語り方について、2点目は視聴覚資料の使い方についてである。

まず1点目の語り方について、講和後の質疑でも、記載された感想でも、高岡氏の語り方について、もっと情感を込めた語り方が良いのではないかと指摘があった。筆者自身も、実際に聴講してみて率直に同様の感想を持った。平和教育では、感性的認識—系統的認識—実践的認識といった指摘があるように<sup>7</sup>、まず学習の入り口段階として、戦争の悲惨さやむごさ、人の命が失われていく悲しさをしっかりと捉えることが大切であると指摘されてきた。それを踏まえると、やはり情感のこもった語り口が求められるのではないかと考え、西田氏にも高岡氏にもそれぞれに意見をしたことがあった。しかし、西田氏も高岡氏も共にそうした話者自身が涙を流すような情感のこもった語り方は、逆に聞いている方たちが覚めてしまうのではないかと、あえて淡々と語ることの方が、その時起こった事象をきちんと伝えるだけではなく、その時の体験者の気持ち、思いがしっかりと伝わるのではないかと考えから、意図的に淡々と語ることを目指し

ているとの意見であった。実際の「語り」は、その時の聴講者、状況によって構成されるものであり、状況に合わせた「語り」が求められるのであろう。それは、先の戦争体験の「語り」の研究で、特に沖縄のひめゆり平和祈念資料館の「証言員」である新崎昌子氏(昭和3年生、1945年次は高女4年)からも、「説明員」である仲田晃子氏からも伺っている通りである。固定的な「語り」ではなく、スキルとして「被爆体験伝承者」の方達の話術の成熟を今後期待したい。

次に、2点目の視聴覚資料の使い方についてである。これもまた、西田氏・高岡氏と学生達・筆者の意見が分かれた点である。学生の感想では、前述した様に講和時の背景に使用したスライドの悲惨さを考慮すべきとの指摘であった。筆者自身は、さらに西田氏と高岡氏それぞれに、やはり「語り」だけではなく、原爆投下やその後の悲惨な状況について効果的に視聴覚資料を使うべきではないかと意見をしたことがあった。しかし、それに対する西田氏・高岡氏それぞれの意見は同様で、必要最小限に留めるべきだとの意見であった。「被爆体験伝承者」の「語り」は、やはり「語り」の継承であることにこだわりたいとのことである。まず「語り」をしっかり継承し、実際の講話でそれをしっかり語っていく。先ずそのことを第一義としていきたいとのことであった。しかし、これもまた、今日の子供達達の状況を鑑みた時、筆者としてはやはり工夫が必要な点ではないかと考える。

1 2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究(C)「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」。

2 2012-2014年度科学研究費補助金基盤研究(C)「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」。

3 2015-2017年度科学研究費補助金基盤研究(C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」。

4 「次世代の平和教育」については、昨年度日本社会科教育学会第64回全国研究大会(静岡大会)自由研究発表「教員研修における平和教育—広島市、長崎市、那覇市の取り組みを事例として—」, また論文としても同名のタイトルで秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第70集,(秋田大学教育文化学部, 2015年3月), 1-18頁にまとめている。その特色として、以下3点を指摘した。

(1) 継承的アーカイブの活用

(2) 戦後の平和希求活動への着眼

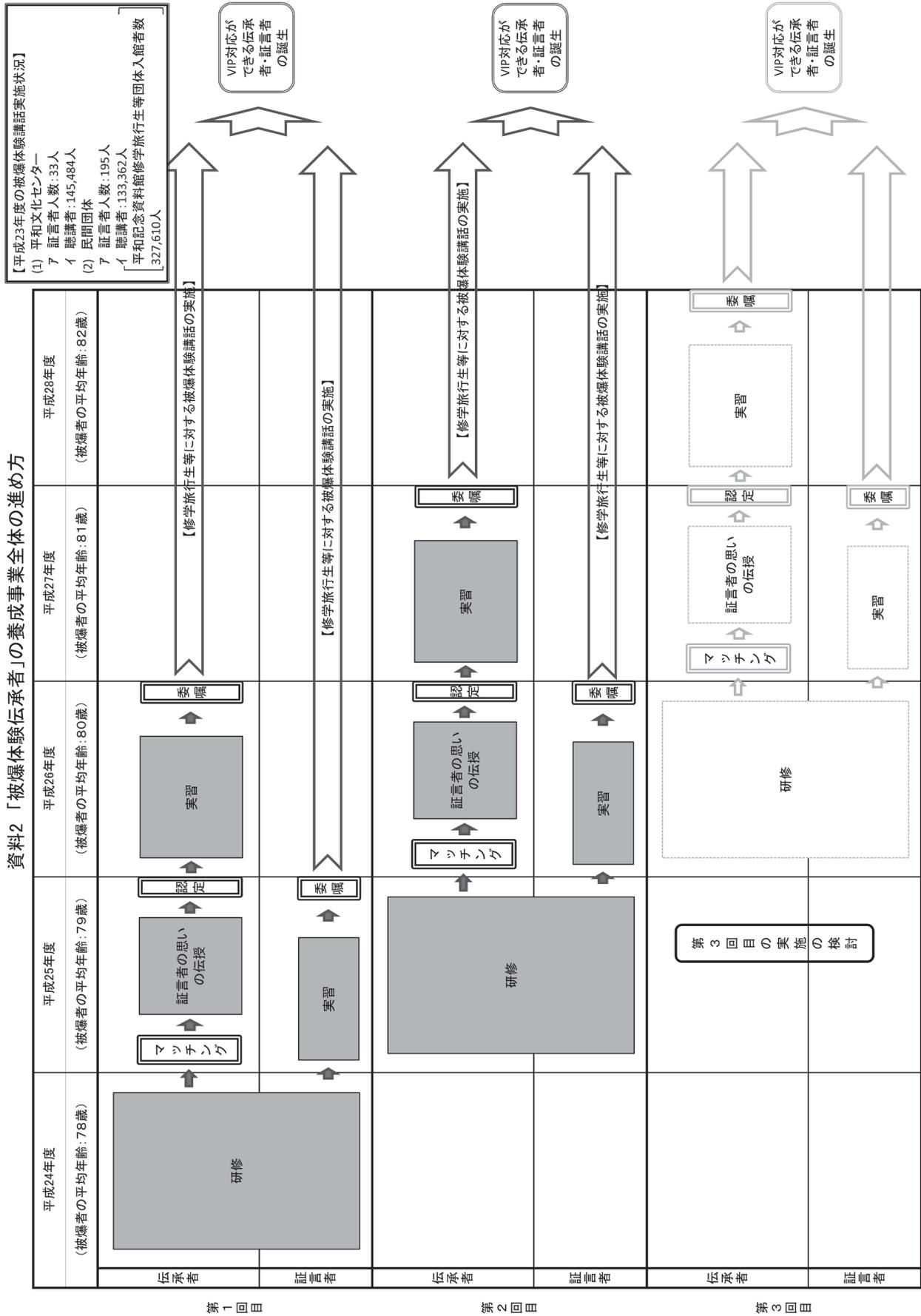
(3) 目的の平和教育から方法的平和教育へ

5 前掲註2。

6 広島市HP「被爆体験伝承者募集」より。

7 安達喜彦「子どもたちの平和認識を深めるために—平和学習と歴史教育の課題—」歴史地理教育者協議会編『歴史地理教育』第380号,(歴史地理教育者協議会, 1985年), 100-109頁参照。

資料2 「被爆体験伝承者」の養成事業全体の進め方



第1回目

第2回目

第3回目

・広島市民国際平和推進部平和推進課提供資料より

## &lt;資料4&gt;

平成 27 年 6 月 2 日  
平和記念資料館啓発課

## 被爆体験伝承者による伝承講話の定時開催の実施結果(5月分)について

## 1 実施回数

曜日	日本語	英語	合計
月	5	3	8
火	6	4	10
水	6	3	9
木	2	1	3
金	4	5	9
土	13	5	18
日	12	5	17
合計(A)	48	26	74

時間帯	日本語	英語	合計
9:30~10:30	8	0	8
11:00~12:00	10	6	16
13:00~14:00	10	8	18
14:30~15:30	11	5	16
16:00~17:00	9	7	16
合計	48	26	74

## 2 参加人数

曜日	日本語	平均 (人/回)	英語	平均 (人/回)	合計	平均 (人/回)	前月平均
月	34	6.8	27	9.0	61	7.6	10.8
火	61	10.2	71	17.8	132	13.2	9.8
水	43	7.2	20	6.7	63	7.0	11.5
木	19	9.5	10	10.0	29	9.7	8.0
金	38	9.5	23	4.6	61	6.8	5.0
土	110	8.5	25	5.0	135	7.5	4.5
日	96	8.0	19	3.8	115	6.7	8.5
合計(B)	401	—	195	—	596	—	—
平均 ((B)/(A))	8.4	—	7.5	—	8.1	—	—
前月平均	9.4	—	7.7	—	8.8	—	—

時間帯	日本語	平均 (人/回)	英語	平均 (人/回)	合計	平均 (人/回)	前月平均
9:30~10:30	40	5.0	0	—	40	5.0	3.0
11:00~12:00	103	10.3	35	5.8	138	8.6	8.3
13:00~14:00	82	8.2	53	6.6	135	7.5	8.0
14:30~15:30	107	9.7	56	11.2	163	10.2	10.7
16:00~17:00	69	7.7	51	7.3	120	7.5	7.7
合計	401	8.4	195	7.5	596	8.1	—
前月合計	160	9.4	85	7.7	245	8.8	—

## &lt;資料6&gt;

## 高岡昌裕氏被爆体験伝承者講和 (2015.7.16, 於秋田大学教育文化学部, 93分46秒, 23,758字)

## 1 インTRODクシヨNー自己紹介と被爆体験伝承者をめざしたきっかけー (5分5秒 (5.4%), 1,200字 (5.1%))

私がなぜ、被爆体験伝承者ということを目指そうと思ったかということについてのお話をしていきたいと思います。私が高校生1年生だった20年前は、戦後50年の年で、非常に平和ということにみなさん興味が向いていました。その中で一つのイベントがあって、それが、広島女学院高校というところで開催された、全国高校生平和サミットでした。世界15か国の高校生を広島に一堂に集めまして、英語でインターナショナルな会議をして、みんなで平和について考えようではないかというようなイベントでした。当時、私は比較的まじめな学生の部類に入っていたので、それに招かれまして、そこで発表会もしまして、世界の高校生たちと、平和について考えようじゃないか、これからも連携していこうじゃないかという決意を誓い合ったんですね。

にもかかわらず、戦後50年が過ぎ、私も大学に入り、広島を出ると、8月6日という重要な日が、自分にとってだんだんと遠くなっていったというか、薄いものになっていきました。そういえば、今日は8月6日だった、もう気が付けばお昼だったという時もありました。そういうことを何年かしていくうちに、これでいいのかなという思いが自分の心の中に、しこりのようにありました。広島にいて、8月6日の8時15分になるとサイレンが鳴り、それでもう広島の人はいないやでも今日は8月6日なんだということを知るんですけど、やはり県外ではなかなかそういうことがないため、非常に疎く感じていました。

私は県庁に入ったといいましたが、青少年養成にかかわる仕事をしつつ、今度は行政からではなく、司法の分野から青少年問題に関わりたいと思うようになり、少年事件を専門に扱う弁護士になりたいと思い、法科大学院に入りました。法科大学院を卒業すると司法試験の受験資格が得られたのですが、毎日毎日勉強漬けの日々で、社会から少しずつ、自分が遠ざかっていくような感じを覚えました。そうした中で起こったのが、東北での大震災でした。周りには、ボランティアに行った人もたくさんいました。でも当時の私は、そうした中で、自分が今しなければならぬのは勉強なんだと、言い聞かせて、自分にできることは勉強とウォーキングぐらいのものだと、自分をごまかしていたように思います。

そうした中で、自分もいつか社会に貢献できるようなことを何かしたいという思いがあって、でも何かボランティアをやるのだったら、自分の経験に聞いかけて、何か得意分野で生かせることはないかなという思いがありました。そのように考えていた時に、出てきた事業が、広島市の被爆体験伝承者の養成プログラムでした。語り手を養成して、語り継いでいこうという機運が高まった年度があり、私も奥さんにこういう事業があるんだけど、やってもいい?と尋ねたところ、ぜひやったらいいとのことだったので、迷わず応募したということが、私がこの伝承者を志望した経緯です。

## 2 広島市被爆体験伝承者事業の概要と課題ー体験していないことを伝承することの難しさと意義ー (11分5秒 (11.8%), 1,824字 (7.7%))

続いて、伝承者事業の概要についてお話をしたいと思います。1年目は、証言者の方のお話をひたすら聞きました。自分は、どの証言者について、どの証言者の話を後世に受け継いでいくかということを選んでいくということが1年目でした。当時は20人から30人くらいの証言者の中から、いろんな話を聞いて、その中から私は2人の人を選び、2年目はその人に個別の伝承を受けて、それを1万字のレポートに起こしました。3年目は、実際に自分が講話をして、練習して、どんどんアウトプットしていくという流れでした。

私が選んだのは、新宅勝文さんという人と、植田のりこさんという方でした。まず簡単に2人の自己紹介をしますと、新宅さんという方は当時最高齢の19歳で、爆心地から約1.5キロという極めて隣接した地域で被爆をされた方です。当時、19歳という年齢の男子が広島にいたことは本来あり得ませんでした。なぜかという、みなさん兵役に駆り出されていました。そんな若者がどうして広島にいたかということは、不思議なことですね。実は新宅さんという方は兵役を免除されていました。なぜ免除されていたのかということは、また後程、詳しく説明したいと思います。ただ、19歳に経験したということで、記憶が極めて鮮明です。

もう一人の女性、植田のりこさんという方は、女学校、今でいうと中学2年生の時に爆心地から2.4キロ離れたところで被爆をしました。この方は、妹さんをなくされたという経緯がありまして、自分の大事な妹を亡くした悲しみ



と思います。まず1番目は満州事変ですが、日本軍が中国で線路を爆破して「これはお前たちがやったんだろ」と言いがかりをつけて、満州国という独立国家を建設しました。その後国際連盟が調査をして、日本軍に対して引き揚げるようにとメッセージを送り、これに反発した日本が国際連盟を脱退し、国際社会からどんどん孤立していきます。ですので、この満州事変というのが近代の歴史というものにおいてきわめて重要な変換時であると考えます。

そして2番目は日中戦争についてのお話です。先ほどの満州事変のあとで、日本は今度は中国本土を制圧します。これは原爆投下の8年ほど前のことです。広島には当時兵士の訓練をする練兵場というところがありました。当時はですね、時計という物がいらなかったのですが、それはなぜかという朝になると起きろというラッパ、夜になると早く寝ろというラッパが鳴るからです。当時、兵隊を見送る様子はどうだったのでしょうか。小学生も大人もみんな旗をもって並びました。そこでテンポよくラッパが鳴り、練兵場から兵士が出てきます。沿道のひとはみんなバンザイバンザイと旗を振ります。でもそのときに、不思議と顔を向ける兵士は誰ひとりいませんでした。部隊長さんだけが「ありがとうございます」「ありがとうございます」と頭を下げていました。その日中戦争の当時の中国の政治の中心は現在の北京ではなく南京でした。その南京を占領したときは日本中が喜びにわきあがりました。みんな旗をもって軍歌をうたいながら、南京攻略に万歳と練兵場のほうへ向かって練り歩いたんですね。夜になっても歓喜の熱は収まらず、提灯をもって同じようにバンザイバンザイと歩きました。当時はそれを提灯行列と言いました。

しかし、そんなうれしいときばかりではありません。戦場で死んだ兵士が骨になって帰ってきますときは、広島では兵士が遺骨を抱いて悲しそうに行進します。ラッパ隊の音はとても悲しそうです。みんな下を向いてだれひとり足音一つ立てない、そういう重々しい行列をします。

3番目の太平洋戦争についてのお話です。日本軍は南京占領の際に多くの一般人を殺害したとされています。そのため中国では激しい抵抗を受けて戦争が長期化していきます。日本は資源が少ない国だったので、石油などの資源を求めて今度は東南アジアを攻めていきます。こうした中、日本はアメリカの海軍の基地があったハワイの真珠湾をいきなり攻撃して太平洋戦争に突入します。日本は短期間のうちに広大な地域を次々に占領しますが、それも長くは続きません。日本は1942年のミッドウエー海戦で敗戦すると立場は不利になり、戦争は長期化していきます。

では、当時の市民の生活はどうだったのでしょうか。当時は報道の自由も言論の自由もありません。もし政治を批判して、それが警察の耳に入ればたちまち逮捕される時代でした。日中戦争がはじまった翌年に新しい法律ができて、軍事が最優先になります。国が戦争するにはとてもお金がかかります。一般市民の生活は苦しくなり、戦争が長引くにつれて食糧不足が深刻になりました。衣類、麦、みそ、醤油、マッチなどが国民に配られた切符と引き換えたうえでお金を払ってようやく手に入れることができましたが、その量も圧倒的に不足していました。海に海水を汲みに行つてそれで量を薄めて倍に使っていた、そういう時代だったんですね。

若者は次々に戦争に駆り出されていくと働き手が不足し、今度はそれを補うために学生が働きに出されたのです。「もう学校に行って勉強しなくてもよろしい、そのかわり工場に行つて働け。国のために働け。」これを学徒動員といいます。空襲がひどくなると、国の命令で強制的に建物を壊し、道路の道幅をひろげたり空き地をつくったりしました。家の柱にのこぎりで切りこみを入れて家をみんなで大勢でロープで引っ張って家を倒したりしました。これを建物疎開と言いました。これは、当時の建物がほとんど木造だったので、火災が燃え広がるのを防ぐために行つたことです。力仕事は大人がやりましたが、がれきの後かたづけは当時の中学生が朝早く手伝っていたということです。その当時は軍国教育ということが盛んに行われていました。日本は神の国で、天皇陛下は神様だ、当時は敵の兵につかまったり、捕虜になつたりしてはいけない、と教えられていたのです。だから女性でも竹やりなどの訓練をして少しでも敵の兵士にけがをさせたり、つかまらないように逃げることを教えられていました。当時の国民の意識をととてもよく表したスローガンがあります。「ほしがりません、勝つまでは」、さらに「ぜいたくは敵だ」というものもあります。当時の人々の様子をとてもよく表しています。ただただ耐える生活、おなかですいても我慢がまん、みんな自分の生活を精一杯切り詰めて、お国のためになんとか力になりたいと頑張っていました。そんな状況で、戦争に反対していたら、すぐに非国民といわれるような時代です。

ではここで、新宅さんが小学生だった頃のお話をしていきたいと思います。新宅さんは家が貧しかったため、今のお金にして600円しか学校に持っていくことができませんでした。これにはわけがあって、新宅さんのお母さんは病気で寝込んでいました。そのための薬代が必要だったので、それを用意することができなかったのです。学校に行つて、今日は持ってきたかと聞かれるのですが、「今日も忘れた」、「今日も忘れた」と続いていたのです。ある時先生に「お前みたいなやつは後ろに立っとれ」といわれ、教室の後ろに立たされたそうです。その日の夜、新宅さんはお母さんたちが「なんとか工場長に言つてお金の前払いはできんかねえ」と言っているのを聞きました。でも、それは厳しい

と言っていたそうです。それで、学校にいったら俺はどうなるだろう。学校に行きたくないということを思っていたそうです。朝になって新宅さんは学校に行きたくなかったのだけれど、新宅さんのお母さんをみると、すごく落ち込んでいて、むしろ鼻歌を歌いながら学校に行きました。お母さんを元気づけるためです。さあ先生について「職員室に来なさい」と呼び出されてしまいました。新宅さんが職員室に行くと、お金をもってこない理由について尋ねられました。たまたま新宅さんは「先生俺んちは貧乏だ」とわあと泣き出してしまったんです。

そうすると、すぐに先生が新宅さんを抱きしめてくれました。しばらくすると、新宅さんの頭の上にぼたぼたとしずくが落ちてきたそうです。何だろうと思って見上げてみると、なんと先生が大粒の涙を流して泣いていたそうです。先生は言いました。「新宅、本当につらいのはお前のお父さんお母さんだ。だからお前はしっかり勉強しろ。そして社会にでたらしっかり働いて少しでもお前のお父さんお母さんを楽にさせてやれ。」そういうことを言ってくださったそうです。新宅さんは先生のこの言葉に勇気ももらいました。そのお昼休みに食事をしていた周りの先生方がみんな新宅さんの周りに集まって、女の先生は新宅さんの涙を拭ってくれたそうです。「新宅、学校に来たら男の先生はお前のお父さんだ。女の先生はお前のお母さんだ。だから何か困ったことがあれば何でも相談しなさいよ。さあ、がんばれがんばれ。」といて、先生はみんな新宅さんの頭を叩き、肩を叩いて励ましてくれたそうです。それからというもの、新宅さんはめきめきと毎日勉強を続け、なんと小学校ではずっと一番になるくらい勉強ができるようになりました。先生に「がんばれ、がんばれ」と励まされて、新宅さんは自分の心の中に何か根性が伝わったということをおっしゃっていました。この出来事が、後になって大きく響いてくるということをお話します。

日本の男子は、当時1945年頃になりますと、満17歳で軍隊に入る場合があります。また一定期間、2年間の兵役を終えても今度は緊急事態の場合には再び招集されて軍隊に入らなければならなかったのです。新宅さんは今は自動車を作っているマツダというところで働いています。マツダは当時はピストルを作っている会社です。

同じ年頃の人は、みんな戦争に駆り出されていたんですが、新宅さんは当時一生懸命勉強して、大変優秀な技術者になったおかげで、会社から特別に要請して、「こいつだけは戦争にやらないで」という特例が認められて、新宅さんは兵役を免れることができました。

さて、具体的な話をする前に、ここでもう一度原爆というものについて整理をしておきたいと思います。アメリカは当時、巨額のお金を使いまして、原爆の開発ということをしていました。さあ、日本に原爆を投下するぞ、ということになると、当時は17の地域がその対象に選ばれた。それから、爆風で効果的に損害を与えたいという条件で、目標選定が進められていき、最終的には広島、小倉、長崎が残り、その中で第一目標が広島になりました。

原爆が爆発する瞬間には、強烈な熱線と、放射線が四方に放射されるとともに、爆風が起って、これらの3つが複雑に作用し合って大きな被害をもたらします。

まず、熱線です。爆発とともに強い熱線が放射されます。爆心地周辺の地表面の温度は、3,000～4,000℃にもなります。爆心地から600m以内の家の屋根瓦は、瓦の表面のガラス質が一瞬にして沸騰して、ブツブツの泡状になっていたこともあるそうです。これを今では、被爆瓦、原爆瓦と呼んでいます。この強烈な熱線で焼かれた人は、重度の火傷を負いました。即死する人も多かったです。

それから爆風です。凄まじい爆風によって、被爆地から約2kmの範囲では、木造家屋のほとんどが倒壊しました。鉄筋コンクリート造りの建物でも、窓は吹き飛ばされてしまいました。この爆風によって、人は吹き飛ばされたり、飛ばされたガラスなどで大怪我をして負傷しました。倒壊した建物の下敷きになって、死んだ人もいました。倒壊した建物に閉じ込められて、その後発生した火災によって焼け死んだ人もいました。

そして、3つめは放射線です。原爆はこの、通常の爆弾では起こらない放射線を出す、というところに特徴があります。この放射線は、人体にかなりの悪影響を与えます。放射線により深刻な被害を受けた人の多くは、急性障害で数日のうちに亡くなりました。また被爆は長期間にわたって被爆者ががんなどを引き起こし、被爆者の健康を現在もなお脅かし続けています。何年経ってから自分の体にどういう影響が出てくるかということについては、未だによく十分に解明されていません。ですから、生まれてきた子どもに当たる被爆2世や、私のような被爆3世に対しても、被害を与え続けているということが現状であります。

原爆にあった人は差別も受けました。外見に火傷などを負ってしまったり、またそうでなくとも、放射線によって、生まれてくる子どもにも何か悪影響があるのではないかと不安がありました。例えば、被爆者であるというだけで、結婚を断られることもありました。原爆によって孤児になってしまった人も大勢いました。

さあ、いよいよこれから1945年8月6日当日のことをお話していきたいと思います。今日は2人のお話をしたいと思います。まずは新宅さんという方のお話から順番にしていきます。では、新宅さんが体験した、8月6日当日の出

来事について、これからお話していきます。

その日は朝からとてもよく晴れて、日差しの照りつける、真夏のとても暑い日でした。新宅さんは、前日の8月5日の夜から徹夜で仕事をして、6日の朝早くに自宅に戻ってきました。簡単な食事、茶碗で少しご飯を食べて、蚊帳という虫除けのテントを張って、布団を敷いて横になったその直後です。一瞬大きな爆発音がして、あたり一面が真っ暗闇です。1分たっても2分たっても明るくならない。次第に目が痛くなって、呼吸が苦しくなってきました。もう死んだと思いました。それが、自分が生きているとわかった時には、もう言葉にできないくらい嬉しかったそうです。運が良かったんです。落ちてきた屋根の瓦に、もう少しで当たるところでした。先ほど言った、蚊帳の上に瓦が落ちて、顔の上に瓦が当たらずに済んだんですね。「本当に運が良かった」とおっしゃっていました。

とりあえず外に出て驚いたのは、広島街が隅から隅まで見渡せるということです。当時の家屋はほとんど木造でしたが、1発の爆弾でどうして広島街がこんなになってしまったんだろうという風に思っている時のことでした。あちらこちらから、「助けてくれ、助けてくれ」という声が聞こえてくる。見れば、倒れた家屋の下敷きになった人が、泣き叫んでいたんですね。

さあ、新宅さんは、近所のグラウンドに避難することになります。新宅さんが近所のグラウンドに避難していると、小さな男の子が、「お母さん、お母さん、痛いよ、熱いよ」といって泣いていました。火傷で皮膚はほとんど剥がれていました。でもみんな怪我をしていますから、その子がそんな風に大怪我をしても、誰も寄り添って見てあげる人はいません。新宅さんはせめて、照りつける直射日光を避けてやろうと、大きな楠木の根元に寝かせてあげました。さあ、しばらくして、数時間が経ちました。あの子はもう死んだかもしれないな、と思って声をかけてみたんです。「坊主、生きとるか」。そうすると、男の子は顔を上げました。なんと生きていたんです。「お兄ちゃん、水が飲みたいよ」と言います。「よし、わかった」と言って、必死で水を探しました。ようやく見つけたのは、グラウンドの近くにあった浄化水槽にあった、ほんの少しの泥水です。

コップなんかありませんから、新宅さんは仕方なく、寝巻を切って作ったカップにその水を染み込ませて、その子を抱きかかえてその口元で絞ってやりました。そのたった数滴の水を、男の子はこくこくと喉を鳴らして飲んだそうです。泥の混じった、臭い水をです。そして、「お兄ちゃん、ありがとう、美味しかったよ」と言って、新宅さんの胸にカクンと顔を当てて死んだそうです。「ばかやろう、目を開けろ」と言っても、もう返事はありませんでした。せめてお母さんにひと目会わせてあげたかった。考えてみれば、その子は一度も「お父さん」とは言いませんでした。新宅さんはその時思いました。ああ、こんな小さな男の子が、生まれた時にはもうお父さんは戦争に行っていて、その子はお父さんの顔も知らずに死んでしまったんじゃないかな。そんなことを思うと、不憫でなりません。その子をその場にそっと寝かせて、手を合わせて冥福を祈ってあげることしかできませんでした。

さあ、別の場所に行ってみますと、今度は燃えている家の前で、女性が立ち尽くしていました。よく見れば、それは同級生のお母さんでした。「おばさん、何しとん、はよ逃げんさい」と言うと、おばさんに、「ばかやろう、自分の子どもが死にかけとるのに逃げる親がどこにおるんや」と言われ、見れば倒れた材木の家屋の隙間から、新宅さんの同級生の女の子の顔を出していました。女の子は新宅さんの顔を見るや、「良かった、お願いよ、お母さんを連れて逃げて。私が何度言うても言うことを聞かんのよ」と言います。「ばかやろう、お前はすぐに助けちゃるけえ」と言って、新宅さんは周りを探しまわって、倒れた家屋の材木を持ってきて、それをてこのように使って、なんとか女の子を助けようと、倒れた家屋の材木を持ち上げようとしましたが、びくともしませんでした。

次第に火が強くなって、周りに照りつけるような熱風が吹き付けてきました。たまたまそこから離れた。そして、これがその女の子の最後の言葉でした。「お願い、この世の最後のお願い、お母さんを連れて逃げて。私の言うことを聞かなかったら、あの世に行ってあんたを呪って食い殺してやるから」と言って、女の子はわあっと泣きました。もう仕方がなかった。隙を見て、新宅さんは、おばさんを連れて逃げました。おばさんに蹴られて、殴られて、暴れられて。最後に女の子は「きゃあ、熱い」と言って、天国に行った。死んだ女の子の同級生は辛かったでしょう、生きたかったでしょう。更に、助けてあげることの出来なかった新宅さんも、辛かったでしょう。手を合わせて、冥福を祈ってあげることしか出来ませんでした。

新宅さんは、「生きたいのに死んでしまった人は、辛かったと思うが、生き残ってしまった側の人もまた辛かった」ということを言っていました。助けようと思って抱きかかえた人が、自分の胸の中でカクンと死んでしまった時の感触を、何年経っても忘れることができなかつたそうです。多くの人が、「水をください」とお願いしてきたそうです。当時は、「水を飲んだら死んでしまう」ということを言われていたのですが、新宅さんは、もうどうせ死んでしまうんだからと思い、何人も水を飲ませてあげました。水を飲ませてあげるといっても、コップでごくごく飲ませてあげる

わけではありません。ハンカチで絞ってあげるくらいです。そのことで、新宅さんは、「自分は何人殺しをしたんだ、自分は人間を殺した化物だ」とおっしゃっていました。

私は、それは違うと思います。大怪我をして、今にも死にそうな状態にある人が、「水が欲しい、水が欲しい」という風に泣き叫んでいました。そういうことに心を痛めて、せめてもということで水を飲ませてあげたんです。新宅さんは、心優しい方だと思いました。化物なんかじゃありません。私が、新宅さんを伝承しようと思ったのは、そういうことに心が動いたからです。

(2) 植田のり子さんの体験—8月5日の日記が最後に行方不明になった妹への思い— (15分 (16%), 2,886字 (12.1%))

では、次に植田さんの話をしていきたいと思います。8月6日、植田さんが体験したのはどういうことだったのでしょうか。植田さんは当時、学徒動員を受けていて、工場のグラウンドで朝礼を受けていました。強烈な光がピカッと光ったその瞬間から、全く音が聞こえなくなり、気を失って倒れていました。反射的に親指を耳の穴に入れて、残りの4本の指で目を覆っていました。爆風で鼓膜が破れたり、その圧力で目玉が飛び出したりしないように、そういう姿勢をとるように当時教えられていたそうです。植田さんは爆心地から約2.4kmのところまで被爆しました。ですが、奇跡的に火傷1つ負いませんでした。なぜでしょうか。それは朝礼の時、先生が機転をきかせて、とても暑かったので、熱中症で倒れる人が出てはいけないからということで、校舎の影に生徒を並ばせていたからでした。

その当時、3人ほど遅刻してきた人がいました。その子達が、列の一番後ろに並びます。残念ながら、そこは影になっていなかったで、その3人は顔や腕にひどい火傷を負いました。遅刻をしたのには訳があったんですね。朝の7時過ぎに空襲の警報が出され、そのあと解除されたんですが、その影響で車が遅れてしまった。寝坊したわけじゃありませんでした。ただ運が悪かった。

それから避難開始の指示が出されて、先生を先頭にして、山の中にある避難所に避難するということになりました。道には色々なものが散乱して、家はなぎ倒されたようになっていました。大火傷を負った人がたくさんいました。飛んできた角材が目刺さって泣き喚いている人もいたそうです。植田さんはできるだけ見ないように、避難をするということだけに集中しました。前を歩いている子の後姿だけは絶対見失わないように、緊張感が張り詰めた中で避難しました。

やはり避難する途中で、多くの人が「水をください、水をください」と頼んできました。もう何人にも言われたんですが、火傷の人に水をあげたらやはり死んでしまう、と言われていたので、植田さんは水はあげませんでした。でも夏のあんなに暑い日に、怪我をして自分で水を汲みに行くのもできないのに、今考えたら水をあげたら良かった、という風に後悔していました。

避難しながら川のそばまで来ると、もう橋が落ちてなくなっていました。先生の指示で、潮が引いて川の水が少なくなってから、川を渡ろうということになりました。植田さんは、怪我をした人には応急手当をしようと立ち上がります。日頃から応急手当の訓練を受けていて、当時は救急袋という薬の入ったカバンを持っていたんですね。

その時、火傷をしてシャツがボロボロになってしまった大きなおじさんの側に寄って行きました。「今行ったら、汽車は動いているかな」と言っていたので、植田さんは、「分からないけど、水が引いたら川を渡って避難するから、一緒に行こう」と言ってあげたそうです。そのおじさんに、植田さんは応急手当してあげました。不思議なことに、応急手当をするということで勇気が湧いてきたと言っていました。さあ、潮が引いたので川を渡ります。駅にたどり着いてみると、そこはもうボロボロでした。「おじさん、山の方に一緒に避難しよう」と言ったんですが、おじさんは「もういい、もういい」と言って、その場に座り込んで動かなくなりました。何を言ってもそれ以上何も答ええないし、みんなとはぐれなくなかったので、そのおじさんはもうそこにそのままにして避難しました。今でもその場所の近くを電車で通るときは、おじさんは無事に避難できたかな、ということのを思い出して、そっと駅の方に手を合わせるんだそうです。

さあ、避難を続け、山の避難所まであと少し、というところまで来ました。途中にあった小学校の救護所に、なんと植田さんと同じ中学校の1年生が避難している、という情報が入りました。先生と、数名の生徒が、その生徒の安全確認をするために戻ることになりました。植田さんの妹がそこにいるかもしれない。植田さんは友達に、「そこに戻ったら」と言われたそうです。でも、こんなところまで緊張の張り詰めた気持ちで逃げてきて、後戻りするなんてとてもできなかった。怖くて出来なかった。植田さんは、その確認することはしませんでした。

救護所を見に行き帰ってきた先生によると、1年生は体育館の脇で、横になる場所もなく、ひとかたまりになっ

てうずくまっていたそうです。自分の口で名前を言えた子はすぐに書きとってもらったんだけど、それすら言えなかった子どもは、命が消えると掘られた溝に運び込まれて焼かれてしまった、とのことでした。先生には、「そこに妹さんはいなかったよ」と言われたそうです。

これは、その絵なんですけど、当時の亡くなった人を積み上げて焼かれる姿です。高く積み上げないのは、中まで火が届かないからなのだと兵隊さんに教えてもらったとおっしゃっていました。

その日は、避難所で夜を明かしました。そしてその8月7日、もう家に帰ることになった。途中で軍のトラックが止まっていたので、側に行ってみると、荷台に兵士が乗って、生存者の名前と住所とその避難先を、大声で叫んでいました。植田さんがその様子を見ていたら、突然聞いたことのある名前が呼ばれました。植田さんのお父さんとお母さんが避難している場所を、兵士が言いました。すぐに、ああ、あそこだと、緊急事態の時には家族全員がそこに集まろうと決めていた場所だと分かりました。その時、ようやく植田さんの中に、ここが戻ってきたような気が確かにしたそうです。植田さんのお父さんは、97歳まで長生きをしておられました。亡くなるまで、妹さんの遺体を探し出せなかったことについて、ずっと後悔していたそうです。植田さんは、自分が妹を探しに戻らなかったということについて、最後までお父さんに打ち明けることが出来ませんでした。

被曝の翌日には、拾ってきたもので煮炊きをする姿がありました。寝ている人もいたそうです。人間は、寝たり食べたりしないと生きてはいけません。植田さんはそういう光景を見て、子供ながらに、人間の生きる強さというものを実感して勇気づけられたとおっしゃっていました。広島はその当時、「これから75年は草木も生えないだろう」と言われていました。ですが今では、緑の豊かな街に、経済的にも豊かな街に復興しました。

さあ、植田さんの妹さんがですね、最後に日記を残していたということなんです。その植田さんの妹さんの日記は、8月5日で終わっています。その日記の内容を読み上げてみたいと思います。

「8月5日、日曜日、晴れ。午前中は友達3人で、私の家で勉強しました。午後は川に泳ぎに行きました。今日は大変良い日でした。」

これが、原爆投下前日の日記とは、にわかに信じられないものです。翌日には、その3人は、3人とも行方不明となりました。その中の1人、植田さんの妹の友達の話ですが、なんと2ヶ月前に神戸で起きた空襲で焼け出され、原爆投下の3日前に広島に避難してきて、原爆にあってしまったということだそうです。

#### 4 平和について考える一戦争はなぜいけないのか、つらい体験をした被爆者がなぜこれまで語ってきたのか— (4分 (4.3%), 988字 (4.2%))

これまで、おふたりの話をしてきましたが、今までの話を聞いてどう思いましたか、皆さん。戦争というのは、良くないことだと思ったのでしょうか。戦争はなぜいけないのでしょうか、そのことについて少し考えてみたいと思います。

まず、戦争がいけないと言えるひとつの理由はですね、そこで生活をしている一般の市民を巻き込むということです。人々は日常の暮らしをしていました。前の日には川で泳いで遊んでいたという、本当に日常の生活です。それが、戦争によってメチャクチャにされてしまった。戦争によって犠牲になるのは、いつも庶民です。

当時の人々は、空襲によって自分たちが目標とされてしまわないよう、電気の明かりが自分の机だけを照らすように、電球にカバーをかけました。そういう薄暗い中で、ひっそりと息を潜めて暮らしていました。それが、戦争が終わると、もうそんなことはしなくていい。そんなカバーは取り払って、家の中がパッと明るくなった気がしました。その時、ああ、平和になったんだな、ということを実感したんだそうです。

今、盛んに言われている、国を守るということについても考えて欲しいです。国を守るという言葉は、確かに聞こえは良い言葉ですね。でも、国を守るために人があるのではなくて、人を守るために国があることを考えなくてはなりません。戦争の実態というものをよくよく見てみると、本当に厳しいものです。太平洋戦争では、多くの人が、食べるものがなくて餓死しています。

安全保障関連法案というものが可決されそうな見通しになっていますね。国の安全ということは、まさに他人事ではなくなくなっていく、ということでしょうけれど、今一度これをきっかけにですね、どうするのが一番良いのかということを考えてみるべきではないかと思っています。

核兵器というものはですね、女性も子どもも関係なく、無差別に、ただそこにいる一般市民を殺してしまいます。偶然生き残った人にも、ガンなどの恐怖を与え続けるというものです。核兵器は絶対に、世界中から廃絶してしまわなければならないと思います。この世に核兵器が存在する以上、やはりそれが使われてしまう恐れがあるからですね。

核兵器が戦争を防いでいるのだ、という意見もあります。抑止力ですね。でも、やはり争いは話し合いによって解

決するべきで、核開発に使うお金があれば、もっと別のことに使うべきではないかと私は思います。

##### 5 メッセンジャーとしての伝承者—被爆者からの伝言— (9分45秒 (10.4%), 2,576字 (10.8%))

さあ、これまで話してきましたが、こうしたつらい被爆体験をされた方が、どうして自分の体験を話してきたんでしょうか。自分の家族や友人を失った、というそういう辛い体験を、本当は思い出したくもないわけです。ましてやそれを誰かに話して聞かせるということは、私たちが想像できないくらいに辛いことなんだと思います。自分の大切な人の命を一瞬にして奪われた悲しみや憎しみというものは、言葉では表せない、表現できないくらいなものだと思います。

被爆者の人が口を揃えていうことは、「自分が生き残ったのは、ただ運が良かっただけだ」あるいは、「それは、紙一重だったんだ」ということです。「本当に紙一重のところで、自分が生き残っただけなんだ。でも自分が生き残ったからには、生きてくても生きられなかった人の分まで、生きなければならぬ。悲しみや憎しみの感情を乗り越えて、そういうものを乗り越えなければ、戦争という負の連鎖は断ち切ることができない」ということをおっしゃっていた。だからこそ、自分の体験を後世に伝えて、誰ひとりとして自分と同じような苦しみを味わって欲しくない。そういう、絶対に広島を繰り返してはならないという一心で、体験を話してこられた。被爆者が100人いれば、100人の思いがあります。これからの将来を担っていく子どもたちには、色々な人の色々な経験を聞いて、自分が生きるということを常に考えていってもらわなければならないんだろうと思います。

絶対に戦争をしないんだという意見を表明することが、被爆体験を伝えていた私たちの使命ではないかというふうに考えます。戦争が起こるときは、考え方の違うもの同士が自分の意見を譲らずに主張します。そして、最後には自分の主張を暴力によって通そうとして戦争になる。戦争を防ぐためには、自分と違う考え方を尊重するということが大切です。お互いに自分の考え方が正しいというふうに決めつけていると、ずっと平行線のままで、歩み寄ることができないからです。そして自分の意見を主張しようというほど、自分の意見を主張しようというときに、決して暴力に頼ってはいけないということが大切です。暴力で自分の思い通りに相手を従わせるような、心の底から納得できなければ、不満というものはずっと心の中に残ったままです。そういう不満が、また暴力に結びついたりしています。話し合いで解決できるように、辛抱強く抗議をするということが大切だと思っています。

今日はみなさんと一緒に原爆が落とされるまでの経緯や、原爆の被害の実態、それから戦争はどうしていけないのかという難しい問題を考えました。最後に承継者のお二人から、みなさんに是非とも伝えて欲しいというメッセージがあります。それをお伝えしたいと思います。まずは植田さんから。日本の将来を担う子供たちに、なんとか勉強してほしいということを伝えていってくださいとお願ひされました。ここは、教育学部でもありますので、みなさん教師を目指されている方が多いんじゃないかと。教師を目指されているという方います？多いですね。どうか子供たちに勉強することの楽しさをですね、わからないことを自分で調べて正解が一つではないということですね、自分自身に考えを持つということも大切ですけど、教えて欲しいと思います。たくさんの方を受け入れていくためには、まずはいろんな考え方があるということを学ばなければなりません。「みんなと同じでいいや」というふうにしかならないと、自分が正しいと思う意見を主張できなくなったり、あるいは、間違っていると思っていることを、わかってやってしまうことにつながるからです。知らないからといってみんなに流されているのは、戦争という同じあやまちを繰り返すことになりかねないということです。だから、知らないことは罪だといっても言い過ぎではないくらい、将来を担う子どもたちにはたくさん勉強して、いろんな知識を吸収していってもらえるように促してほしいと思います。

次に、新宅さんからのメッセージをお伝えします。新宅さんがおっしゃっていたのは、「今は平和であるということを決して当たり前ではないということを知ってください」ということでした。戦争をするかしないかという判断が、非常に政治に左右されるところがあり、政治のあり方を決めるのは、実は国民がひとりひとりの選んだ政治じゃない。最近選挙権をですね、18歳まで引き下げるということを行いました。選挙の重要性ということを考えますとですね、これからみなさん、自分に出来ることの第一として、選挙には必ず行くようにしていただきます。あんまり実感は湧かないかもしれないけど、日本にも戦争の時代がありました。当時書くことも知らないうちに亡くなっていった人の分までしっかりと生きていきますと、どうか今日は心の中で手を合わせてみてください。新宅さんはですね、毎年8月6日になると、その時亡くなっていった人の冥福を祈るためにですね、当時の場所を一つ一つ訪れて、花を供えていくということを毎年欠かさずやってこられたということです。そのとき、その場所をですね、教えてもらいまして、一緒に同行しまして花を供えて、手を合わせました。日差しが強かったので日傘代わりに傘をさしています。こういう感じですね。この、たまたま訪れた場所でどういう状況だったのかということを知りたいのですが、たまたま訪れたところには原炭水槽があって、白骨化した死体がのどに手を当てて空に手を挙げたまま、立ったままで死んで

いたというのを思い出して、新宅さんはこの光景を一生忘れることはできないというふうにおっしゃっていました。どれだけの無念の、生きることに對する執念を持ちながら死んでいった方も多くいたということを鑑みて、手を合わせずにはいられなかったとおっしゃっていました。

さあ、今日話したことを通して、平和を学習することが、決して他人事でも、昔の話でもなくて、実は自分自身の問題だということに気付いてもらえたら。私をもっと工夫をしてですね、一人でも多くの人的心里に残るような講話をしていきたいと思います。今日は第一回ということで拙い講話になってしまいましたが、みなさんご清聴どうもありがとうございました。私の話はこれでおしまいしたいと思います。

## 6 質疑応答など (23分1秒 (24.5%), 6,228字 (26.2%))

<外池>：はい、高岡さんありがとうございました。一応10分間くらい休憩を入れてから簡単に質疑応答ということにしていきたいと思いますので…聞きたいことがあれば質問してもらって結構なので自由に質問なり意見なり言ってください。どうでしょう。じゃあ院生の鎌田君からいってみようか

<鎌田>：聞いてて、すごい情景だなんて感じて、やっぱり戦争って怖いし、忌まわしいものだと思います。一つ、新宅さんと植田さんからのメッセージが出てきたんですけども、高岡さんの被爆体験伝承者という立場からして、高岡さん自身が、我々教員を志望している人たちが、どういうふうに関戦とか平和について伝えていけばいいのかという願いがあれば教えていただきたいです。

<高岡>：結構最初に話をしたんですが、実を言いますと被爆体験の話を書くということがあまりこう、得意ではないというか、やっぱり退屈になってしまうみたいなのから話を聞くということは、やっぱりわからなくなる、事実関係とか。そういう自分の正直な気持ちに基づいてですね、これをやろうと思ったときに、本当にシンプルな構造で分かりやすい所から伝えるということが、その、聞く方の立場を考えると、必要なんじゃないかというふうにして感じて、それがひとつ、できるんじゃないかと思ったときに感じたんですね。だから相手にとって一体いつの話をしてどこでしているのか分からなくなって、おいてかれちゃう感がないような構成にできればなーというふうには、ひとつ気をつけていることにはなるかなと。だから、聞き手の立場に立っていくというのが理想です。あとは、いつかやりたいんですけど、参加型の講演というか対話型というか、要は、「挙手してください」と聞かれるのではなく、一つのことについて考えるということで、「考えてもらうきっかけ」を作れないかなーということを考えていまして、なかなかいいアイデアがないんですけど、例えば被爆者の人は自分のつらい体験を話してきた。それはどういうものを想像するために、例えばですよ、自分の体験しためっちゃめっちゃつらかったことってありますか？と聞いて、「じゃあそれを話せますか」という何かその自分自身に置き換えて考えて、考えるきっかけを提供したいなというふうには考えています。答えになってるかな？

<外池>：他はどうでしょう？ 安達さんどうですか？

<安達>：三年の安達由貴といいます。今お話を聞かせていただいて、初めて講演をされたということなんですけども、初めてとは思えないくらい語りが上手で、土地も離れているし私たちに関してはさらに実感がわきづらいので、話をちゃんと聞くことができるのかと不安なところもあったんですけども、高岡さんがわかりやすくお話をしてくださったので、さっき鎌田さんも言っていたんですけども、情景を思い浮かべながら、自分たちもそこにいるような気持ちになって考えることができたので今日はすごくいい話を聞けたなと思いました。で、私は教育文化学部にも所属していて、植田さんの方から将来を担う子どもたちへ「勉強をしてほしい」と言っていたんですけど、実際学校教育の場で例えばどんな教え方をしたら、平和の大切さっていうのを伝えられるのかなというのが私としては興味があるので、何か「こういう教え方をしたらきっと子どもたちも平和の大切さを考えるきっかけになるんじゃないか？」というのがあれば、教えていただきたいです。

<高岡>：教育というのは、言ってしまうと自分で考えてもらうきっかけを与える。まず自分で考えないと何かを生み出すことができない。そういう意味で、詰め込み型じゃないですけど、キャッチボールじゃないですけど、考えるような工夫ですね。あとは視覚的なもので訴えたりとかそういうものもどんどん取り入れていくというような工夫。とにかく工夫をするしかないんですけど、それはやっぱり発掘していくしかないですね。例えば最新のやつでいうと、ネット参加型の授業とか、いろいろ模索していったらいいと思いますね。一つの答えとしては、考えるきっかけを与えてあげるといっていいですね。被爆者の方がそろってお二方ですけども、「自分の体験なんかおそらく聞いてもらえない。」ということをおっしゃっていました。どうして原爆が落とされたんだろうというところまでの交通整理というものをあげた方が、いいんじゃないか。そういう意味で、自分の何かきっかけ、歴史の疑問をもって調べてみよ

うとかいうふうにつながっていけば非常にいい効果があると思えます。

<外池>：その他どうでしょう。それでは同じ立場で参加して下さっている伊藤さんにもお話を頂ければありがたいけれども…

<伊藤>：こんにちは。私は土崎港被爆市民会議で小学校へ行ってお話をしている、伊藤と申します。みなさん、土崎空襲のご存知ですか。わかりますか。広島は、爆弾が落ちてからそのあと8月の15日の終戦の前日、8月の14日に土崎が爆撃に遭いました。日本最後の空襲と言われております。それでその話をまた学校のほうへ、それは土崎地区の学校ですよ。または市内の中学校もあります。それから大仙市のほうの中学校とかもありますけども、その要請に基づいて私たちは行ってお話をしているわけですけども、やはりお話のときにね、まあそれはなんですかね、いまでは地域の人との交流を持つ授業が小学校ではあるんですよ。また地区のその爆撃、空襲があったということで要請があるんですよ。そのときにね、私たちはまず現物、今ある私たちにあるのは、はくどうの破片、それを持って学校のほうに参ります。その他史料とか実際爆弾を持っていくときもあります。それは不発弾であとで処理したんですけど。そういうものを持っていきますと、生徒さんたちはやっぱりそれはほんとに実感として受け取ってくれます。それから実際その当時着て、亡くなった人の着ていた洋服とかそれを持っていきますとほんとに実感にして受け取って下さって、やはり子どもさんたちの感想文をいただくんですけども平和についてほんっとによく考えていますよ。だからそういったこともあるということですね。みなさんあの学校の先生になられた時にはそういったこともやっぱりちゃんと私たちを活かしていただければなんとかご協力できると思います。それからやはり先ほどの広島の方の語り部の話ですよ。それは前もって私も前からテレビとかで知ってました。ほんとに今日はすごく参考になりました、私。というのはね、子どもたちに話すときはケーブルテレビさんが作ってくれた土崎空襲の映像を見せて、それこそ語り部がいなくなるということで、作ってもらったものを見てそれをあとで話すんですけどもやはり今、今年70年ということで子どもさんたちだけではなくて、大人の方たちからの要請がすごく多いんです。今の大人の人たちがやはりまだ戦争そのものっていうのを体験していない人が多いので、先ほど戦争に至ったプロセスね、道筋を整理してあげるっていうのはすごく参考になりました。それからこう話をして戦争の話をしていくのいいかなと。それで私は体験者ですけども、本当に小さいときの体験ですから悲惨なところを私、見てないんです。

ちょっと長くなりますけど、爆弾が2発落ちました。土崎空襲というのは、目的地は日本石油なんです。ですけども私のとこの、離れている住宅地にもかなり被害が出ましたので、先ほどの新宅さんと同じように、やはり自分がね、実際そこにおいて、その自分の周辺で自分の周りの人たちがたくさん亡くなったということで、やはりこれは私の使命じゃないかなということで、私はやっているんですけどね。だから色々材料は小学校の先生になったときに、中学校でもいいですよ、材料は色々ありますので私たちに声をかけてください。よろしく願いいたします。長くなってしまいましたすみません。

<外池>：ありがとうございます。でもあれですよ、広島は例えば高岡さんのようにね、語り部の証言者の方からさらに高岡さんたちの伝承者へって、バトンタッチがね、されているけども土崎空襲はね、どうなんでしょうね。いま伊藤さんのようにね、直接体験の方から次世代に今度ね、移り変わろうとする時代なんです、なかなかね、ほんとに花岡事件の場合もそうですけど、継承ということだと、もう立ち消えゆくだけなんじゃないかと危機感を僕なんかはね非常に強くありますよね。伊藤さんどうぞ。

<伊藤>：すみません。ぜひお話させていただきたいと思って。やはり語る人がいなくなればどう伝えていけるのかな。もう想像の、ひとつの歴史の出来事として、あと想像の世界に入ってくるから。じゃあどうすればいいの。体験者がいなくなると。我々が映像を作ったことをすごいなということを広島の方が言っていました。そしてまた広島の高岡さんがいろんな体験者から十分いろんなこと聞いて研究して工夫しながら、で問題は自分がどう思うか、どう心が動かされたか、ということ伝えていくという。これになんていうか私は思っただけ。じゃあ少し勉強したらいろんなことを今のうちに聞いて、そして知識を深くしてそして思いも想像しながら伝えていくっていう、時間になってきているかなあと思っただけ。なんか気持ちが少しね、整理できたかなという風に思います。それから先ほど話がありましたけども子どもたちはね、小学校6年生が毎年学校の方に来てくれて話するんですけども、一時間、もう集中力切れるんです普段は。ところが真剣になって、こう目が爛々としてね、聞いてる。やはりなんていうか戦争の悲惨さから始まる命の大切さ、問題はそこに行くんじゃないかな。その歴史ということも大切です。日本も侵略したんだよ、加害したんだよということね、あまり言わないんです。人間の命の悲惨さから始まって行くんです。そこから抑止力、今もでしょ。その今日、国会でも戦争する国になっちゃった。残念ですけど。やっぱり暴力対暴力、

テロ対報復テロっていうまだその発想。21世紀これからの子どもたちの世界がね、そういう暴力で平和を、国を守るのか、そういう発想がないようにして。命、原点である人間の命。戦争して加害者も被害者もみんな子どもたちお母さん方、命が奪われるっていうところにね、もっと原点に戻っていかないと、これからの平和っていうか。それが平和憲法70年。節目の年なんですけど、70年間歯止めになってきたんです。日本は理想的な憲法なんですよ。それが古くなったとかなんだとかじゃない。あれは法権的に守っていくべき憲法なんです。世界にない平和憲法なんですよ、9条。国連もあの精神で。それを日本は持っておったのに、誇りを持ってね。それを変える、勝手に解釈変えて戦争する国。皆さんも、皆さんも子ども、これからの子どもたちもまた血を流して国を守っていくんで命をかけていくんでしょ。でない方法があるはずですよ。お互いに考えて、特に教職の皆さんですか、皆さんの熱意がね、子どもたちを動かしていくんです。すばらしいほんとに。日本最後の空襲、土崎って言って、これをほんとに言葉通り最後にしたいという思いのこもったメッセージが今年も小中学校全部でのメッセージ、平和のメッセージを募集して、今8月14日にその発表会があるんですけども、良かったら慰霊祭に来て、40年続けております。ボランティアでね。よろしく願います。どうも

<外池>：はい、ありがとうございます。じゃあどうでしょう。その他に

<高岡>：素材は何でもよくてこう何かを学んで命の大切さとかそういうものに繋がっていくということはすごく大事なことだと思います。

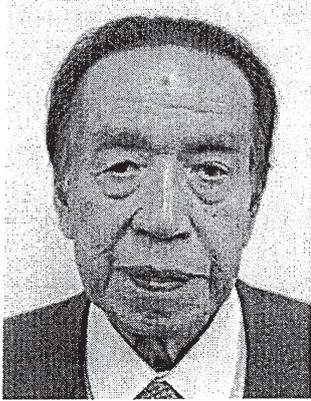
<外池>：はい、じゃあ最後に一人ぐらい、どうですか。じゃあ最年長参加者菊池さんどうですか。

<菊池>：あの、大学院の菊池と申します。どうもありがとうございました。平和問題とかずいぶん長い間実は関心を持っておりまして、伝承者という言葉聞いたとき、最初に実は思いだしたことがあって、俳優さんとの違いとか俳優さんとかですね。ラジオドラマとか、それぞれ平和をテーマにしたドラマとか映画とかあるはたくさんありますけども、それとの違いはなんだろうかなと考えた。広島のかきといいましょうか、そういう思いがあってこういう伝承者を育てていくことになったと思うのですが。率直に申し上げたいことは大変難しいなと思ったんですね。ただやらねばならないと思う。その難しさのなかにあるんだけど、例えば俳優さんたちや映画製作者たちと違うのは、体験なさった方と直接お会いになっているということですよ。その方と直接お会いして、そしてそれを丸ごと全部肌で体験しているというところが、おそらく単にその映像の世界と舞台俳優さんたちと違うところだと思うんです。そういったことをもし重視なさるのであればですね、ちょっと技術的なことなんですけどもほんとにご本人、その体験なさった方になりきってですね、それをそこになにか体験者自身がそこにおられるようなですねそういうことで、もしお話なさればですねこれは相当にアピール、やっぱりあの現実問題として伝聞があって、再伝聞があって、再々伝聞があって、やっぱり人間の受け取る方からすると信頼自体が落ちていかなざるを得ない。でも何とかしてやらなきゃいけないことだと思います。それはなぜかと言いますと、さっき小学生たちが普段授業では飽き飽きしているけども戦争の話とかが始まると目を輝かせ始めるとおっしゃった。これは動物の本能、生物の本能じゃないかと思うんですね。命に対する、平和に対する、これがあればもう人の世の中、人生いいんじゃないかというぐらいに大事なことで子どもなら本能的に感じるのではないかと。それで結果的に話に子どもは耳を傾けるだろうと思いますね。ですからプロジェクトとしては大変難しいんだけどこれぜひ何とかしてやって欲しいなと思います。実質的なことを申し上げるとすれば、なりきって、ただフィクションとして俳優、演劇として続けるのではなくてそこにいるんじゃないかと、植田さんと新宅さんがそこにいるんじゃないか、そんな風な史料を活用なさって、そうするとかなりアピールすることになる。これは社会科教育の角度からも大変に重要なことだといま聞いてて思い、おそらく出番がたくさんあって忙しくなるんじゃないかなという気がしていますけど。ほんとに御苦労さまだと、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

<高岡>：ありがとうございます。ひとつだけ。その確かにおっしゃる通り、ひとつは植田さんからのメッセージがありましてですね。何かを伝えるときに私個人的にお願いされたんですけど、とにかく感情的になるってことをおっしゃってですね、淡々と話せということ別のベクトルでおっしゃるんですね。被爆証言をする際に泣いてしまう方が居るんですね、実際の体験をした方で。でも体験者がこう泣いてしまうとたぶん聴衆の人が置いていかれてしまうのではないかとということをおっしゃっていました。問題意識の中ですが、おっしゃるよう参考させていただきたいです。ありがとうございます。

<外池>：なんかね確かに色々考えさせられる様なことですね。皆さんたちも色々な意見を持ったと思うんですけど、これで一応終わりということにしましょう。最後に感謝の意をこめて大きい拍手をね、高岡さんに送ってください。

## 【資料 7】 ・ 広島市市民局国際平和推進部平和推進課西田満氏提供資料 (2012) より。

 しんたく かつふみ  
 新宅 勝文さんの被爆体験


## プロフィール

1925年(大正14年)12月生まれ。

19歳のとき、南竹屋町にあった自宅(爆心地から1.5km)で工場での夜勤後、寝床に入ったときに被爆。

次姉は被爆後、行方不明のまま

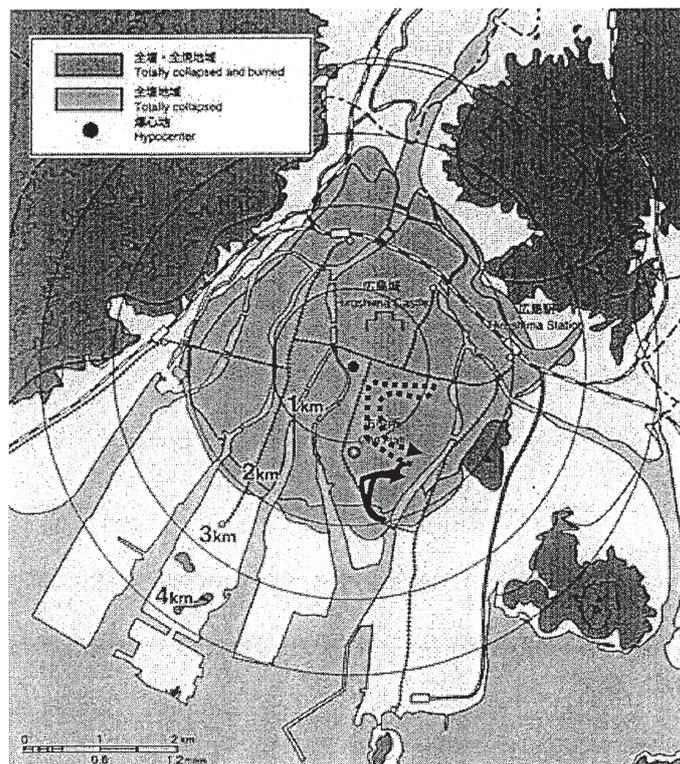
## 被爆の状況

突然、強い光とごう音がした。その瞬間、目の前が真っ暗になり、目が痛く、息苦しくなり、死んだと思った。しばらくすると、小さな光が見えてきたので、その方向へ進み、倒壊した自宅から屋外に逃れることができた。外に出て驚いた。多くの負傷者が行列で歩いていた。自分も一緒に広島文理科大学のグラウンドに避難した。そこには多くの無残な姿の負傷者が横たわっており、正に生き地獄だった。その後、兵士が来て、大型トラックはグラウンドに入れないので、御幸橋へ移動するよう指示された。それを受け、歩けない人を背負い、歩ける人には手を貸しながら、何度も往復した。移動中、死亡する人も大勢いた。

その日は、グラウンドで夜を明かした。爆心地方面はまだ燃えていた。人間を焼いたときに出るリンの青い光が何十も見えた。

翌日、次姉を捜しに爆心地方面に向かった。軍隊が大型トラック7、8台に遺体を山積みしていた。積み残しの遺体は集められて、油をかけられ焼かれていた。その時、遺体の中から「熱い」と叫び声が聞こえたが、兵士は「もう助け出せない」と言い、涙を流した。姉が見つからず、悲惨な光景が広がる街の中心部も捜したが、見つけれなかった。その後、長姉とは再会することができた。

## 被爆後の経路



【8月6日】 →

南竹屋町  
↓  
広島文理科大学  
↓  
御幸橋  
↓  
広島文理科大学

【8月7日】 ..... →

広島文理科大学  
↓  
爆心地方面  
↓  
街中心部  
↓  
広島文理科大学

うえだ のりこ  
植田 規子さんの被爆体験



プロフィール

1931年（昭和6年）9月生まれ。

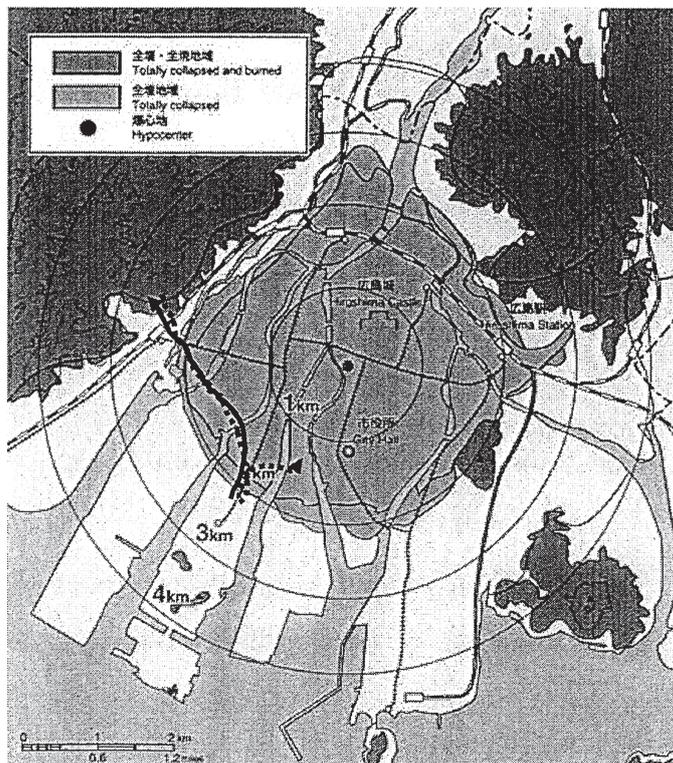
女学校2年生の13歳のとき、南観音町（現在の南観音三丁目）にある学徒動員先の印刷工場隣の校庭（爆心地から2.4km）で、朝礼をしていたときに被爆。

女学校1年生の妹は、動員学徒として建物疎開作業中に被爆し、死亡

被爆の状況

木銃を握り、整列して朝礼を行っていたとき、ピカッとオレンジ色に光った。我に返ったとき、親指で耳をふさぎ、他の指で両目を覆い、地面に伏せていた。仕事部屋に戻り、弁当や非常食、救急薬品などが入ったカバンを肩にかけ、校庭の防空壕へ走った。しかし、既に一杯で入れず、壕の外でうろろしているとき、黒い雨に打たれた。己斐方面へ避難するため川土手へ行くと、橋が落ちて満潮で渡ることができず、引潮を待った。衣服も皮ふもぼろぼろの被災者が続々と避難してきた。全身やけどのおじさんにやけどの薬を塗ってあげた。潮が引いたので、歩いて川を渡り、山へ向かって歩いた。周囲はぞろぞろと、人間とも思われぬ姿で、無言の人々が行列していた。救護所になっている己斐国民学校前に来たとき、県立広島第一高等女学校1年生が収容されていることを知った。妹は同校の1年生だったが、恐ろしかったので、行くことができなかった。妹は今でも行方不明のまま、あのとき、学校に捜しに行かなかったことを今でも悔やんでいる。夜はとても眠る状態ではなく、山の中腹から昼のように明るく炎上する街を泣きながら見ていた。翌日、舟入本町にある自宅に帰った。川や路上には無数の死体があったが、恐ろしくはなかった。

被爆後の経路



【8月6日】 →

南観音町  
（現在の南観音三丁目）

↓

己斐国民学校

↓

己斐の山

【8月7日】 ..... →

己斐の山

↓

南観音町

↓

舟入本町（自宅）



